

繁殖のお話し(その18 哺育管理のお話 4)

(有)シェパード 獣医師 松本大策

夏場は牛さんも人間も暑さでバテ気味。免疫も低下してしまいます。牛を扱うヒトが注意しなければならない感染症があります。繁殖のお話16回目で写真をご覧に入れた「白癬」です。こいつは水虫の仲間のカビでうつる病気で、人間にうつるとタムシみたいな皮膚病になります。ほったらかしておくと体中に広がりますから、早めに皮膚科に行って「牛の真菌症をうつされた」と言って診ていただいた方がよいですよ。

さて、先月まで3回にわたって哺乳のお話しをしてきましたが、今月はそろそろ飼料給与のお話しに移りたいと思います。自然哺育の場合であれば、生後数日から母牛が食べている粗飼料などを遊び食いしはじめます。人工哺育であれば、生後3日目くらいからミルクの他にスタータを遊び食いさせていきます。人工哺育の場合、僕はスタータを100g程度食えるようになってから良質の粗飼料を与えはじめます。生後1ヶ月目に600g程度のスタータを食べさせられたら成功です。というのも、なかなかスタータに食い付かせるのは難しいものなのです。このあたりは後回しにして、先におおざっぱにセリ出荷までの道筋をお話ししたいと思います。スタータの量は2ヶ月目で 2kg、3ヶ月終了時点で 3kg 程度給与し、3ヶ月終了くらいから育成飼料に切り換えます。

スタータの給与量の一例

生後月齢	～10日程度	生後1ヶ月目	生後2ヶ月目	生後3ヶ月目	生後4ヶ月目
スタータ	100g	5～600g	2kg	3kg	生後3ヶ月終了時点 (3ヶ月齢)で徐々に 育成飼料に切り替え (2週間程度かける)
良質乾草	スタータを100g 食べるように なったら遊び食 いさせる	自由飽食 (量は少ない)	自由飽食	自由飽食	自由飽食

4ヶ月目に育成飼料で 4～4.5kg 食い込めるようにしたら、それ以降は濃厚飼料は増やしません。育成飼料は 4～4.5kg 程度のまま、良質の粗飼料だけを増やしていきます。というのも、3ヶ月齢くらいから粗飼料を消化する力に優れた「第一胃」が発達し



てくるからです。それに育成後期(7～9ヶ月齢)は、腹腔内脂肪や筋間脂肪といった、肥育農家さんに嫌われる脂肪が発達してくるのです。濃厚飼料を多給すると、過肥でサシの入りにくい牛さんになってしまうからです。

みなさん、粗飼料というと栄養価が低い様なイメージがあるかも知れません。しかしながら、良質の粗飼料は肥育前期飼料並にカロリー(TDN)もタンパク質(CP)もあるんですよ。しかも腹腔内脂肪や筋間脂肪の発達は防ぐことが出来ます。ところが粗悪な粗飼料では、カロリーもタンパクもグッと低くなります。目先の値段が少しくらい安くても、飼料価値は1/3程度しかない場合もあります。粗飼料だけは可能な限り良質のものを使うようにしましょう。

スタータを上手に食わせる

先ほどお話ししましたが、子牛によっては、なかなかスタータの食いが上がらないものもあります。こういう子牛にスタータを食い込んでもらうためには、いくつかやり方があります。まず、手やりで白砂糖を 50g 程度なめさせてあげます。子牛は甘いものが大好きですから、すぐに「この人が手から与えてくれるものはよい食べ物だ」と覚えてくれます。何日かこれで砂糖を与えた後、少しずつスタータを砂糖に混ぜて味を覚えてもらうのです。この方法は東北の篤農家さんに教えていただきました。味さえ覚えてもらえたらこちらのものです。それから、スタータを与える容器は、深いバケツよりもなるべく浅めのボウルか洗面器みたいなものの方がよいです。バケツの方が確かにこぼさないのですが、深いバケツに子牛が頭をつっこむと、周りが見渡せなくなって不安になります。気の弱い子牛はそれでバケツから食べようとしなくなることがあるのです。浅めの容器なら、子牛がスタータを食べながらも周囲の様子をうかがうことが出来るので、安心してスタータを食べられるというわけです。それから、ミルクの給与量の図でも示しましたが、離乳のときはミルクを徐々に減らすより、2段階かいつそ一度にやめた方が、そのときに急速にスタータの摂取量が増えます。こまめな農家さんほど、まじめに少しずつミルクを減らしてスタータの食いが上がらないと悩んでいらっしゃるようです。一度だまされたと思って、急速離乳をやってみませんか？

